

吉田克朗にとっての「もの派」——吉田克朗アートアーカイブの調査より——

山本 雅美（学習院大学／茂木本家美術館）

今回の発表では 1960 年代末から 1990 年代末まで活動した現代美術作家である吉田克朗(1943–1999)を取り上げ、彼にとって「もの派」の作家と語られることはどのような意味を持つのかを「吉田克朗アートアーカイブ」の調査を通して明らかになったことを基に発表する。

もの派とは関根伸夫、吉田克朗、小清水漸、李禹煥など 1960 年代末～70 年代にかけて素材をそのままに設置することで作品とした一連の作家の活動を指す。80 年代に入るとその時期の動向が「もの派」という美術の流れの一つとして捉えられるようになり、「もの派展」(1986 年、鎌倉画廊)や「もの派とポストもの派の展開」(1987 年、西武美術館)などの展覧会を通して再評価の気運が高まる。

吉田克朗は大学卒業後から没年までの約 30 年間にわたる画業の中でいわゆる「もの派」と呼ばれる立体造形の作品から、版画、ドローイング、陶芸、油絵など様々な技法と形態の作品を生み出している。しかし現在の吉田克朗研究を概観すると、その評価は「もの派」の作家としての評価が主であり、そのほかの作品については「もの派」の作品とは切り離されている。それは「もの派」が「再評価」された 80 年代以降特に顕著になった。80 年代から 1999 年に没するまで「もの派」の展覧会に吉田自身の再制作による作品出品を続けていたが、同時期に作家は《触》シリーズなどの絵画作品を中心とした新たなステージにいた。作家としては今取り組んでいる作品の発表や評価が中心的な関心事であるはずなのに、かつての作品だけが求められる状況であった。このように作家にとって「もの派」と呼ばれる自身の作品の再制作を続けることの意味は何だったのだろうか。

吉田は親しい人に“自分はもの派ではない”と話していたという(『美学校 1969–2019—自由と実験のアカデメイア』晶文社、2019 年、p. 296)。この言葉には自己認識と評価される作家像の間で齟齬があったことが示されている。その言葉の真意を知るために吉田克朗が遺した日記やノート、写真などいわゆる「吉田克朗アートアーカイブ」の調査を行った。これらの資料が示すのは、吉田が「もの派」の作家であるという枠組みを与えられながらも、それに抗い、自身の追求すべき表現を目指して制作を続ける姿であった。ここから吉田克朗は「もの派」の作家という枠組みで捉えるべき存在ではなく、約 30 年の画業を通して一貫して追求した表現があったと考えられるのではないか。

本発表は現代美術作家が遺した未紹介資料を用いて得られた作家の活動や作品への新たな解釈を示すものである。またこのような失われつつある資料を保存することの必要性もあわせて考えてみたい。